

## キタキツネのキキ

2

作 なかむらよしひろ

キキたちが生まれてからしばらくはいい天気が続き、側溝の中に冷たい雨水が流れることもありませんでした。中はあんがい広く、土がたまって体を横たえる場所もありました。時々通る自動車やトラックの音をごまかさずれば、それはそれで安全な場所でした。そんな所でキキと二二はお母さんのお乳を飲みながらすくすくと育ちました。その間、お父さんはせつせと食べ物をとってきてはお母さんに食べさせてあげました。

生まれてひと月もすると二匹は巣から出るようになりました。でも歩き回る勇気はまだありません。体を半分乗り出して、少し生え始めた草のかげから顔を出して外の様子をこわごわのぞき見るだけです。

「はじめで自動車を見たときにはびっくりして二匹はあわてて側溝にもぐりこみ、お母さんのところまで

とんで行きました。キキは息をきらし、

「ねえ、お母さん、何か大きなものが大きな音をたててぼくの方にむかってくるんだよ」お母さんはやさしくこたえました。

「それはね、自動車と言って人間の乗り物なのよ、あれにひかれたら私たちのような小さな狐はひとたまりもないの。だから絶対に近づってはだめよ、二二もわかつたわね」

「はい」キキと二二はすなおにうなずきました。

それからさらに一月もたつと、二匹は側溝の外に出て遊ぶようになりました。側溝の中ではもう思う存分遊べないほど二匹は大きくなったのです。それに道のはしっこにいるかぎり自動車やトラックは危ないものではないことがわかったのです。

「ぼかぼかと暖かい5月のある日のことです。キキが側溝から顔を出すことと目の前の草に何かヒラヒラするものが飛んでいました。それは小さなモンシロチョウで、キキは蝶々を見るのは初めてでした。珍しくて、そつと鼻を近づけると蝶々はヒラヒラと飛び、そして5センチほど向こうの草にとまりました。キキは体を低くして近づきました。でもあと少しというところで蝶々はまた届かないところまで飛んで行ってしまいま

す。そんなことを何度くり返したあとのこととす。

人の声がしたので振り返ってみるとそこに小さな女の子が立っていました。その向こうには大人の女の人と自動車も見えます。キキはモンシロチョウを追いかけるのにむちゅうになつていて自動車の音に気がつかなくなつたのです。キキとキキのおうちの間には女の子や大人の人がいます。反対側は少し前にお母さんに連れられて一度だけ行ったことのある草むらですが、ひとりで行く勇気はまだありません。キキはどうしていいかわからなくなつてその場にしゃがみ込んでしまいました。すると、その女の子が手を差し出しながら近づいてくるのです。そして何かをキキの前にポンと投げました。キキはこわくなくなつて後ずさりしながら「ウーツ」と小さなきばをむきました。それを見ていた女の子のお母さんがあわてて走り寄りながら、

「かをるちゃん、危ないわ、かまれるわよ」こう言つて女の子をだきかかえて自動車の方にもどつていきま

ました。それまではこの世の中で一番おいしいのはお母さんのおっぱいだと思つていたのですが、それはおっぱいよりもずっと甘かつたのです。おいしくてほつぺが落ちそうでした。キキはあつという間に残りのかけらも食べてしまいました。キキはそのおいしいお菓子の名前を知らなかつたのですが、それはドーナツだつたのです。

「こんなにおいしいものをくれるなんて、人間ってお母さんやお父さんが言うほどこわくないじゃない」

(11月号へつづく)

